

2016 年度 機械制御システム学科

# 自己点検・評価報告書

### 第3章 教員・教員組織

(1) 大学として求める教員像および教員組織の編制方針を明確に定めているか。

《現状説明》

学科として求める教員像を具体的には定めていないが、専任教員の募集に際しては、応募資格として次の条件を提示している(3-1-1)。これが実質的に教員に求める能力・資質に相当するものである。

- (1) 専門分野で博士号を有すること、または同等以上の実績を有すること。
- (2) 専門分野に精通していることはもとより、システム工学に造詣が深く、学部理念にもとづく実践的な教育を行えること。
- (3) 最先端の研究活動に従事し、大学院課程の研究指導ができること。
- (4) 英語での講義が可能であること。
- (5) 地域への貢献、大学運営および各種業務に積極的に取り組めること。
- (6) 本学の教育理念に深い理解があること。

教員組織の編成についても、そのようなかたちで具体的に定めているわけではないが、現在の教員組織の構成は対外的にも明確にされており(3-1-2)、学科がカバーする専門領域(3-1-3)も明確に定まっていることから、欠員が生じた分野の教員を補充するという方式で教員組織を維持している。

《点検・評価と将来に向けた発展方策》

上記のように、教員公募の際には教員に求める能力・資質等を明確に示してきた。教員構成についても大学ならびに学科のウェブサイトに掲載しているように明確となっている。ただし、教員の組織的な連携体制と教育研究に係る責任の所在の明確化についての検討が十分に行われていない。教員の組織的な連携体制に求められる条件や教育研究に係る責任の所在をどのように定めるかという点を検討する。

《根拠資料》

(3-1-1) 教員公募書類の例 (2015年度工業デザイン分野)

(3-1-2) 教員(研究室)の構成

<http://web.se.shibaura-it.ac.jp/qsys/04.html>

(3-1-3) 専門領域の構成

<http://web.se.shibaura-it.ac.jp/qsys/03.html>

(2) 学部・研究科等の教育課程に相応しい教員組織を整備しているか

《現状説明》

当学科は従来の分類では機械工学に属する学科であることから、機械工学の基礎を確実に教育できる教員組織を構成している。これに加えて、システム理工学部にも所属する学科であることから、学部共通の物理学、社会学、工学英語の教育を担う教員が在籍している(3-2-1)。

《点検・評価と将来に向けた発展方策》

学科・学部の教育課程に適合した教員組織を整備している。授業科目と担当教員の適合性を判断する仕組みについては未検討であり、授業科目と担当教員の適合性の評価方法について検討する必要がある。

《根拠資料》

(3-2-1) 教員（研究室）の構成

<http://web.se.shibaura-it.ac.jp/qsyst/04.html>

(3) 教員の募集・採用・昇格は適切に行われているか。

《現状説明》

教員の募集に際しては、専門分野および担当科目を明示し、それに関する教育・研究を遂行できる人物の採用を行っている。教員の退職に合わせた補充であることが大半であるため、退職する教員の担当科目を引き継いで担当する能力を有していることが新規採用の基本的な条件であり、可能ならばより専門性の高い新規科目を設置して選択科目の幅を拡げている。このことは規定のようなかたちで明文化していないが、学科教員は共通の認識を持っている。教員の新規採用の際には、専門分野と担当科目を学科会議の場で確認している。昇格については大学の規定に則って進めている。

《点検・評価と将来に向けた発展方策》

教員の募集・採用・昇格は適切に行われているが、学科として教員人事についての規定は持っていない。学科として教員人事についての規定を作成しておく必要があるか検討する。

《根拠資料》

無し

(4) 教員の資質の向上を図るための方策を講じているか。

《現状説明》

教員の業績評価システムが運用されており、各教員が教育・研究の目標を設定し、その達成に向けた取り組みを推進している。また、学部で実施している授業アンケートには全教員が参加しており、アンケート結果を受けた授業改善の努力を日常的に行っている。さらに、着任 5 年以内の教員は学外の教育研修に積極的に参加している。

《点検・評価と将来に向けた発展方策》

各教員が教育研究活動の点検・評価を行っており、授業アンケートの結果を踏まえながら資質向上に努めている。FD の有効性をどのように評価すべきかについては検討を要する。

《根拠資料》

## 第4章 教育内容・方法・成果

教育目標、学位授与方針、教育課程の編成、実施方針

(1) 教育目標に基づき学位授与方針を明示しているか。

《現状説明》

機械制御システム学科では、2014年度に教育目標の点検・見直しを実施し、学内外に向けて教育目標がより明確に伝わるような表現に改めた。この教育目標は大学ならびに学科のウェブサイトで明示している(4-1-1)。

【機械制御システム学科の教育目標】

機械制御システム学科では、以下の二点をもって、社会の持続的発展を担うことができる技術者人材の育成を目標とする

(1) 多数の要素から構成され、複雑な動作を伴う機械システムを開発するための、機械工学の基礎を習得していること。

(2) 上記の基礎を、もの・人・環境を総合した新たな価値を生み出す「ものづくり」に応用する能力をもつこと。

「最終目標に確実にたどり着くカリキュラム」と題して学科パンフレットとホームページに教育課程の編成・実施方針を明示している。本学科がカバーする専門領域である「システムダイナミクス」「システムデザイン」「エネルギー・環境」の3領域に分けて履修モデル（修得することが望ましい科目のリスト）を作成し、学科パンフレットとウェブサイトで紹介している(4-1-2)。

教育目標を達成するためのカリキュラムを構築しており、開講されている講義科目と総合研究の履修が学位授与の条件である。入学時に配布される「学修の手引き」に「卒業の要件」として必要な単位数が示されている(4-1-3)。

また、ディプロマポリシー(4-1-4)として、4項目の卒業要件を設定している。そのうちの2項目では、システム理工学部の共通科目および総合科目の学びを通じて「システム思考」、「システム工学の理論と手法」を修得することが必要であることを示している。これらに加えて専門科目の知識の修得と総合研究の取り組みを通じ、身につけた知識を活用する能力を修得する必要があることを示している。さらに、技術者倫理観を涵養し、システム工学の素養を身につけた技術者として社会に貢献しうる能力を身につけることを卒業に必要な要件としている。

卒業要件である専門科目62単位の修得に対して36単位は必修科目となっており、必修科目の割合が高い。機械系の基礎的素養として修得しておくべき科目を必修科目に設定することにより教育目標を達成させる狙いがある。修得すべき学習成果については、各科目のシラバス(4-1-5)に記載されている。

《点検・評価と将来に向けた発展方策》

教育目標と学位授与方針との間に整合性はあるが、対応関係にわかりにくい点があるので検討を要する。教育目標と学位授与方針との対応をわかりやすく整理する。

《根拠資料》

(4-1-1)[http://www.shibaura-it.ac.jp/faculty/systems\\_engineering\\_and\\_science/machinery\\_and\\_control\\_systems/index.html](http://www.shibaura-it.ac.jp/faculty/systems_engineering_and_science/machinery_and_control_systems/index.html)

(4-1-2)<http://web.se.shibaura-it.ac.jp/qsys/03.html>

(4-1-3) [http://syllabus.sic.shibaura-it.ac.jp/preliminary/sys/sys\\_2016.pdf](http://syllabus.sic.shibaura-it.ac.jp/preliminary/sys/sys_2016.pdf)

(4-1-4) [http://www.shibaura-it.ac.jp/faculty/systems\\_engineering\\_and\\_science/machinery\\_and\\_control\\_systems/policy.html](http://www.shibaura-it.ac.jp/faculty/systems_engineering_and_science/machinery_and_control_systems/policy.html)

(4-1-5) <http://syllabus.sic.shibaura-it.ac.jp/syllabus/2016/MatrixQ00342.html>

(2) 教育目標に基づき教育課程の編成・実施方針を明示しているか。

《現状説明》

機械力学、材料力学、流体力学、熱力学を主軸として実験、実習、設計、製図等の科目を配置した専門教育のカリキュラムを構成している。機械工学の基礎を確実に修得させるという教育目標と整合した教育課程を編成している。科目区分、必修・選択の別、単位数はシラバスに(4-2-1)明示されている。

他の機械系学科のカリキュラムとの顕著な違いとしては、制御工学 I・II を必修科目としている点を挙げることができる。多数の要素を組み合わせた機械システムを対象とする場合に必須の専門知識であり、これらを必修科目とすることが専門教育の方向性を明確なものにしていると言える。また、工業デザインに関する科目を用意している点は特徴的である。ものづくりにおいて、単に機能の向上のみを目標とせず、もの・人・環境を総合した新たな価値を生み出すという教育目標の達成のための一つのアイデアである。

《点検・評価と将来に向けた発展方策》

機械系の技術者人材を育成することを教育目標としていることから、機械工学の専門教育は主要な柱である。機械系の技術者に必要な専門知識は従来から大きく変化しているわけではないため、専門科目群の構成は従来から大きく変更されておらず、今後も大きく変化することはないと考えている。教育目標に大きな変更がなければ、教育課程にも変化は生じない。

《根拠資料》

(4-2-1) <http://syllabus.sic.shibaura-it.ac.jp/syllabus/2016/MatrixQ00342.html>

(3) 教育目標、学位授与方針および教育課程の編成・実施方針が、大学構成員（教職員および学生等）に周知され、社会に公表されているか。

《現状説明》

学位授与方針はディプロマポリシー(4-3-1)としてウェブサイトで公表されており、学科の教員および学生、さらにはそれ以外の者がいつでも閲覧できる状況にある。

《点検・評価と将来に向けた発展方策》

学生に対しては、単にウェブサイトに掲載しているだけでは十分な伝達が行えない可能性がある。年度開始時のガイダンス等と学生への周知を行う必要がある。

《根拠資料》

(4-3-1) [http://www.shibaura-it.ac.jp/faculty/systems\\_engineering\\_and\\_science/machinery\\_and\\_control\\_systems/policy.html](http://www.shibaura-it.ac.jp/faculty/systems_engineering_and_science/machinery_and_control_systems/policy.html)

(4) 教育目標、学位授与方針および教育課程の編成・実施方針の適切性について定期的に検証を行っているか。

《現状説明》

学部長等から検討の指示があった場合には検証を行っている。

《点検・評価と将来に向けた発展方策》

教育目標、学位授与方針および教育課程の編成が頻繁に変更になることはないため、定期的な検証が必要とは考えにくい。学科の教育活動の中で何らかの不具合が生じた際には検証する。

《根拠資料》

無し

教育過程、教育内容

(1) 教育課程の編成・実施方針に基づき、授業科目を適切に開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

《現状説明》

教育目標の達成のために必要な科目を開設している。学年の進行に合わせて専門性が高くなるような体系的配置を行っている(4-4-1)。

《点検・評価と将来に向けた発展方策》

現段階で授業科目の開講状況に大きな問題はない。数学や物理学のような基礎科目と専門科目との関係について学科内で若干の意見交換を行ったことがあるが、十分にはまとまっていない。数理系の基礎教育や教養教育と専門教育との関係性・位置づけについて検討する必要がある。

《根拠資料》

(4-4-1)[http://www.shibaura-it.ac.jp/faculty/systems\\_engineering\\_and\\_science/machinery\\_and\\_control\\_systems/campus\\_life.html](http://www.shibaura-it.ac.jp/faculty/systems_engineering_and_science/machinery_and_control_systems/campus_life.html)

(2) 教育課程の編成・実施方針に基づき、各課程に相応しい教育内容を提供しているか。

《現状説明》

学士に相応しいレベルの機械工学の素養が身に付くような教育内容を提供している。現段階ではカリキュラムの中に初年次教育に相当する科目の設置等を行っていない。入学直後の新入生を対象としたオリエンテーションを通じてスムーズに大学生活に移行できるよう配慮している。2016年度はグループワークとして、ピンポン球を飛ばすロボットの作成と競技会を実施した(4-5-1)。また、キャリア教育として3年生を対象とした工場見学の実施(4-5-2)やインターンシップへの参加・報告書の提出をもって単位認定するような取り組み実施している(4-5-3)。また、公的研究期間や民間企業等との共同研究等の場で社会人との交流の経験を持たせるような工夫を個々の研究室において行っている。

《点検・評価と将来に向けた発展方策》

学士に最低限必要な科目が必修科目として開講されている。初年次教育については、これまで特に検討をした実績はない。しかし、従来までは大学入学前に小中学校の図工や技術等の教科で体験する機会があった初歩的スキルが身に付いていない新入生が増加しているという印象が強くなってきている。このような状況を受けて、何らかの初年次教育を行う必

要がないか検討する。併せて高大連携に配慮した科目の設置について検討する。

《根拠資料》

(4-5-1) 新入生オリエンテーションの説明文書 4-5-1.pdf

(4-5-2) 工場見学実施要領 4-5-2.pdf

(4-5-3) 「エンジニアリング・プラクティス」のシラバス

<http://syllabus.sic.shibaura-it.ac.jp/syllabus/2016/sys/89223.html?Q00>

教育方法

(1) 教育方法および学習指導は適切か。

《現状説明》

教育目標の達成に向けて、講義、演習と実習・実験科目、製図科目等を適切に採用している。実習・実験科目においては、学生と教員との一対一での面接試問を実施しており、報告書作成やその内容の説明等、技術者としてのコミュニケーションスキルの向上に努めている。大変手間のかかる指導方法ではあるが、学生の個性に応じた直接的指導が可能であると考えている。演習科目では、学生の主体的な参加を促すような課題設定を行っている。また、履修単位制限を設け(4-6-1)、履修科目の学修内容を着実に身につけられるように配慮している。

一方現実的には、いわゆる“楽に単位が取れる科目”への履修が集中するケースもあり、クラス担任がある程度のガイドライン的指導を行ってはいるものの、学生本人が興味を持っている分野において必要となる科目履修を行っているか、さらに、各自の将来像に結び付く科目履修を行っているかについては疑問が残る。この点は単位の実質化と合わせ、今後の大きな改善点となると考えられる。

《点検・評価と将来に向けた発展方策》

教育目標の達成に向けて、学生とのコミュニケーションを重視した指導を行っている。学生を主体とするアクティブラーニングの導入をより一層進めていく。

《根拠資料》

(4-6-1) [http://syllabus.sic.shibaura-it.ac.jp/preliminary/sys/sys\\_2016.pdf](http://syllabus.sic.shibaura-it.ac.jp/preliminary/sys/sys_2016.pdf) (10 ページ)

(2) シラバスに基づいて授業が展開されているか。

《現状説明》

全教員が全ての科目についてシラバスを作成している。毎年見直しを行っている。作成したシラバスに沿った講義等を実施するよう努めている。

《点検・評価と将来に向けた発展方策》

現状で特に問題はないので現状を維持する。

《根拠資料》

無し

(3) 成績評価と単位認定は適切に行われているか。

《現状説明》

成績の評価方法、基準等は各科目のシラバス(4-8-1)に明記してある。

《点検・評価と将来に向けた発展方策》

現状で特に問題はないので現状を維持する。

《根拠資料》

(4-8-1)<http://syllabus.sic.shibaura-it.ac.jp/syllabus/2016/MatrixQ00342.html>

(4) 教育成果について定期的な検証を行い、その結果を教育課程や教育内容・方法の改善に結びつけているか。

《現状説明》

各科目で授業アンケートを実施し、教育改善の資料としている。

《点検・評価と将来に向けた発展方策》

教育内容・方法の改善について組織的な検討は行っていない。学科内で各科目の講義の内容は実施形態等について情報共有を進めながら、教育内容・方法の改善について検討する。

《根拠資料》

無し

成果

(1) 教育目標に沿った成果が上がっているか。

《現状説明》

最終年次に実施している総合研究は、学科における教育の総仕上げとして位置付けられており、与えられた個別知識を身に付けるという受動的な学習から、未解決の課題に自発的に取り組むという能動的な学習に移行する。総合研究を通じて、自立した学びの姿勢を習得させることが技術者人材の育成において極めて重要であり、学科全教員で個々の学生の学習成果を確認することとしている。そのため、総合研究の単位取得をもって学科教育の完了を判定している。総合研究の単位取得については、学生個々の研究室活動について、目標の設定、目標に到達するための計画の立案、目標に到達するための取り組み、目標への到達度を指標とし研究室の指導教員を中心に学科全教員で評価している。

《点検・評価と将来に向けた発展方策》

2012年度から審査にルーブリックを利用することにした。中間審査（口頭発表）、ポスター審査（ポスター発表）、最終審査（口頭発表）にルーブリックを利用し、複数の教員で審査を行うことにより、客観的な評価を行う試みを始めた。その後も毎年継続して実施しており、適宜な評価項目等の見直しを行っている。

当学科のルーブリックでは、指導教員が次の4項目を評価する。

企画：問題の解決方法を自ら提案し、総合研究テーマとして企画できる。

立案：手法および研究計画を立案することができる。

総合：必要な成果物の形で研究成果をまとめることができる。

継続力：研究計画を自ら再検討し、継続的に実施することができる。

また、指導教員以外の審査員は次の3項目を評価する。

実施：研究計画の下で、テーマに応じて、実験や調査、データ分析、数理モデルによる解析および評価ができる。

調査：研究の背景、必要性および価値を、適切な調査の上で客観的にまとめることができ



る。

発表：研究成果を口頭で説明し、討論できる。

このような内容で評価を行うことを学生には事前に通知し、総合研究の取り組みを通じて、修得すべき能力を理解してもらっている。今後は、4年間の学修を通じて何が身に付いたのか、学生の自己評価や卒業生による評価の方法について検討する必要がある。

《根拠資料》

(4-10-1)2015年度ループブック 4-10-1.pdf

(2) 学位授与（卒業・修了認定）は適切に行われているか。

《現状説明》

卒業要件は学修の手引きに明示してある(4-11-1)。所定の単位を取得した学生に学位を授与している。

《点検・評価と将来に向けた発展方策》

学位授与は適切に行われている。

《根拠資料》

(4-11-1) [http://syllabus.sic.shibaura-it.ac.jp/preliminary/sys/sys\\_2016.pdf](http://syllabus.sic.shibaura-it.ac.jp/preliminary/sys/sys_2016.pdf) (8 ページ)

## 第5章 学生の受け入れ

### (1) 学生の受け入れ方針を明示しているか。

#### 《現状説明》

アドミッションポリシーとして、学科の求める学生像を以下の通りに明示している(5-1-1)。

■人と地球にやさしい豊かな社会の実現に強い関心と意欲をもち、国際的視点に立った研究者・技術者をめざす人

■伝統的な基礎科学をベースとした機械工学にさまざまな先端技術分野を組み合わせた新しい「ものづくり」に積極的に挑戦する人

■誠実な人間性、倫理観と適切なコミュニケーション能力を持ち、科学技術にかかわる者として良識ある行動のできる人

■機械制御システム学科の教育・研究環境を十分に活用して、より高いレベルの勉強に自主的に取り組むことができる人

■数学、物理学、情報処理などの基礎的科目と機械工学系専門科目を学ぶために必要となる基礎学力を身につけている、あるいは、これらの科目を学ぼうとする強い意志を持っている人

また、高校段階で習得しておくべき科目の指定を学科独自に行っていない。入試要項に試験科目が示されているのみである。なお、障がいのある学生の受け入れについては、学科会議の中で意見交換を行った程度であり、現在までに受け入れ指針について踏み込んだ検討は行っていない。ただし、学生・教職員健康相談室主導で行っているメンタルヘルスガイダンス後、本年度より全新生を対象に「メンタルヘルスアンケート」を実施しており、その結果が学科でも共有された。学生が自ら不安や気になる点を回答しているため、今後このデータを基に合理的配慮が必要になるケースも出てくると考えられる。

#### 《点検・評価と将来に向けた発展方策》

求める学生像の提示については従来から適切に行われている。入学にあたり修得しておくべき知識等の内容・水準の明示について検討する。障がいのある学生の受け入れ方針について検討する。

#### 《根拠資料》

(5-1-1)[http://www.shibaura-it.ac.jp/faculty/systems\\_engineering\\_and\\_science/machinery\\_and\\_control\\_systems/policy.html](http://www.shibaura-it.ac.jp/faculty/systems_engineering_and_science/machinery_and_control_systems/policy.html)

### (2) 学生の受け入れ方針に基づき、公正かつ適切に学生募集および入学者選抜を行っているか。

#### 《現状説明》

一般入試、大学入試センター試験、指定校推薦については、学科の独自色を持たせるような特別な工夫は行っていない。ただし、受験科目の一つである理科については、機械系学科であることを考慮して、物理と化学を指定している。

AO入試(5-2-1)では、本学科が求める学生像に合致し、志望理由や入学後の構想、将来の目標が明確であり、それらの実現に強い意欲と情熱を持って自立的に取り組める個性豊かな人材を募集している。科学技術に関する素養としての数学と物理・化学の基礎知識、コミュニケーション能力、学問への意欲、熱意を評価するとともに、ものづくりに関わる簡

単な実技を実施して学科への適性を評価するような特色ある選抜を実施している。

入学者選抜の際の合否判定は、学科が選出する代表者（複数）により実施している。代表者は毎年交替しているが、選抜基準などの適切な引継を考慮し、全員が交替するのではなく、半数程度の交替を行っている。

《点検・評価と将来に向けた発展方策》

適切な学生募集と入学者選抜が行われている。現状を維持する。

《根拠資料》

(5-2-1)[http://www.shibaura-it.ac.jp/examinee/special\\_exam/r7u3rf0000002vnk-att/r7u3rf0000004qm3.pdf](http://www.shibaura-it.ac.jp/examinee/special_exam/r7u3rf0000002vnk-att/r7u3rf0000004qm3.pdf) (9-10 ページ)

(3) 適切な定員を設定し、学生を受け入れるとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。

《現状説明》

2016 年度の在籍者数と定員超過率（＝在籍学生数／収容定員）は、 $362/320=1.13$  となり、在籍者数は適切であるといえる。

取得単位数の不足により 3 年時から 4 年時への進級の段階で留年が毎年発生するため、3 年生は定員超過になることがある（2016 年度は定員 80 名に対して 3 年生の在籍者が 118 名）。留年者への対応については、4 年生の担任の教員からの報告を受けて学科会議で議論を行っているが、安直な救済措置による教育水準や教育効果の低下を抑制するために、特別な事情の無い限りは追試などを行わないことを基本的な合意としている。留年者の発生による定員超過を回避することを目的とした取り組みについては検討を行っていない。

《点検・評価と将来に向けた発展方策》

現在の在籍学生数は適切である。2017 年度から定員が 80 名から 90 名に増員されるが、定員超過が生じないように学生数を管理する。

《根拠資料》

無し

(4) 学生募集および入学者選抜は、学生の受け入れ方針に基づき、公正かつ適切に実施されているかについて、定期的に検証を行っているか。

《現状説明》

実際に入学してくる学生の資質が、アドミッションポリシーに掲げた「求める学生像」に一致しているかは、それを評価する指標がなく、評価できる段階にない。ただし、AO 入試については、面接により多くの時間をかけ、より一層慎重に審査を行うこととしたことから、求める学生像に近い学生の受入が実現できていると考えている。

学生による教育評価アンケートの集計結果(5-4-1)によれば、教育および学生生活の両面で学生の回答は概ね良好であり、学生の受け入れは適正に行われていると考えている。

《点検・評価と将来に向けた発展方策》

卒業の際の学生のアンケート結果を通じて、入学者選抜が適切に行われていることを確認している。学科独自に満足度の評価を行う必要があるか検討する。

《根拠資料》

(5-4-1) システム工学部主任会議-20160610 別添資料 2

## 第6章 学生支援

(1) 学生が学修に専念し、安定した学生生活を送ることができるよう 学生支援に関する方針を明確に定めているか。

《現状説明》

学科として学生支援に関する方針は定めていない。

《点検・評価と将来に向けた発展方策》

修学支援、生活支援、進路支援に関する方針の明確化が必要であるか検討する。

《根拠資料》

無し

(2) 学生への修学支援は適切に行われているか。

《現状説明》

各学期の成績表をクラス担任が確認し、成績不振などの問題を早期に発見し、個別指導を行う体制を採っている。

《点検・評価と将来に向けた発展方策》

休・退学者については本学では休学者の約 1/3 に当たる 150 名程度が毎年退学しているが、退学者の多くはフリーターであり定職に就いていないことが分かっている。留年者や休・退学者を出さないようにするには、新入生の学修行動を把握する必要がある。これは、入学後の半期での取得単位数とその後の学業不振による休学者にある程度の相関が認められることによる。いわゆる勉強癖がついた学生は問題ないが、最初の躓きから思うように単位取得が出来なくなるケースがあるため、1 年生あるいは 2 年生の学修行動調査を行うことで、どの時期にどのような措置を講ずるべきかを明らかにするのが効果的である。そこで学科会議での承認の下、1 年生と 2 年生に学習行動に関するアンケートを行った。一次集計結果が 3 月に学科内で共有されたが、今後も必要があれば継続して行うことで効果的な対策が取れる可能性がある。

最近では、友人とコミュニケーションを取ることが難しいためにグループワーク形式の実習に参加できない学生、あるいは実験・実習レポートに何を書けばよいのか、何を要求されているのかを考えられない学生の存在が明らかになりつつある。これらの学生の中には一般入試を経て入学している学生もおり、基礎学力に劣るといふこととは異質の性質を持つ場合も多い。最近ではこのような学生の一部は、ある一定の割合で発達障がいと診断されるケースが増えており、この場合には担任教員が当該学生の支援を行うことが多いが、担当教員のみでの負荷が大きくなるように、学科内で支援体制を取るなどの対策が必要である。学生の満足度向上を図るためにも、今後は発達障がいの学生へのサポート体制の充実も検討しておく必要がある。

なお、中退防止は全学的な課題であるが、学科としても中退学生を増やさないこと、さらには休学生を増やさない取組み自体が必要である。

《根拠資料》

<https://drive.google.com/drive/folders/0B45EeOsLZusrR1JhZlpGVU5aQWM>

(3) 学生の生活支援は適切に行われているか。

《現状説明》

クラス担任を中心として学生が自由に相談できる体制をとり、同時に学科会議にて情報共有を行うことで支援体制を構成している。

《点検・評価と将来に向けた発展方策》

メンタル面に不安のある学生については、専門的な対応が必要な場合が多いため、健康相談室と連携を採りながら、学生の生活支援を行う体制を構築しておく必要がある。大学全体として、学生・教職員健康相談室（専任カウンセラー、精神科校医）、学生センターおよびクラス担任の必要に応じた情報共有および集団的支援体制の強化が進んでおり、クラス担任のみに過度な負担が掛からないような仕組みが整いつつある。今後も学生支援においては、特に新任の教員に対する学科の支援が重要である。

《根拠資料》

無し

(4) 学生の進路支援は適切に行われているか。

《現状説明》

進路選択に関するガイダンスはキャリアサポート課主導で実施されている。学科独自のガイダンスは行っていない。

《点検・評価と将来に向けた発展方策》

就職活動は学生自身が行うことであるため、基本的には学生側から要請があった場合に教員が支援を行っている。求人企業側が現在と同様の採用活動を続ける限りは、学科の対応にも大きな変更はないと考えられる。

《根拠資料》

無し